

00

---

プロローグ

僕は今のこの食品会社に就職してからずっと、顧客開拓の仕事をしてきました。営業部で商品の販売先を広げていく仕事です。

自分で言うのもなんですが、それなりに実績を上げ、誇りを持って働いてきました。周りの人からは「出世頭だね！」なんて言われることもありましたが（ここは自慢してもいいところだと思っています）。

会社の中で出世することが、いつの間にか僕の目標になっていました。早く昇進する。目に見える成果を出して！僕はその目標に向かって突っ走って来たわけです。そして、目標がまたひとつ現実になる時がきました。営業部のマネージャーに推薦され、間もなく昇格の内示があるだろうという知らせが届いたのです。

それまでの貢献が報われた気持ちになりました。本当に嬉しいことでした。ついに！心のどこかには、そうなって当たり前だ、という思いもありましたが、これからはもうひとつ上の次の

ステージで仕事をするんだ、もっと上を目指すんだ、と思っていました（ここは少し謙虚にしておきますが）。

ところが、そんな時、事件は突然起こりました。

僕は部長に呼ばれて、「相模原さん、私のところにこんなものが届いているよ……」と一通の手紙を見せられたのです。見るとそれは『彼の昇格に断固反対します』という内容の抗議文でした。誰かが匿名で送りつけてきたのです。

まったく同じ手紙が、もうひとりの他の部長にも届いていました。それは「お前は知らない、出ていけ」という嫌がらせか、嫉妬のあらわれかもしれません。ひどい！これは自尊心が深く傷つけられるというだけでなく、これからのキャリアが丸つぶれになるということなのです。

（いったい誰が書いたものなんだよ……）

心の中でいろいろな人を疑ってみました。あいつかもしれない、いや、あいつも怪しいと……。そんなふうに考えると、僕は怒りで周りのことがまったく見えなくなり、会社の誰も信じられなくなってきました。そして自分なりにその手紙の送り主を探そうとしました。

けれども、手紙の差出人はそう簡単には見つかりません。手の込んだ嫌がらせの張本人はわからないまま、僕はますます焦り、そのころから仕事にも身が入らない日が続いていました。（仕事がヒマな時期だったこともありましたが）

僕はひとりで考えてみます。

（こんな時、落ち着くために、自分はどうしたらいい？ 何ができる？）

怪文書の事件が起こってから約一カ月が過ぎようとしていましたが、僕はなかなかその状況から抜け出すことができません、おまけに、さらにイライラする出来事が起こってしまいました。昇進

の話そのものが延期になってしまったのです……。

（一体何が起こっているんだ？ この事件を操っているのは誰なんだ？）

ちようど疑心暗鬼の絶頂にいた時にたまたま昔の上司から紹介されたのが『自由が丘の陰陽師さん』でした。

突然呼び出されて「君に紹介したいクライアントがいる」と言われたのです。陰陽師はペンネームだそうで、普段は執筆の他に、荒れた農耕地だとか古民家の再生、企業向けのコンサルティングや講演をしている人だと言われました。

「君のことが頭にまつさきに浮かんだんだ。今までとは違うタイプの新しい顧客になってくれそうなんだ。一度会って内容を詳しく聞いてきてくれないか」

荒れた農耕地や古民家の再生をしている新しいクライアント？

僕は言われるままにその日のうちに連絡をとり、自由が丘の陰陽師さんに会いに行ってみることにしました。ただ、その時はとにかく何でもいいから、この居心地の悪い場所から抜け出したいと思っていたのです。僕の今の状況については、以前の上司の耳にも入っていたようでした。そんな僕のことを思い出してくれたのは何かの気遣いかもしれませんが。

僕は大急ぎで会社を抜け出し、自由が丘へと向かいました。

駅前のにぎやかな通りを抜けて、グーグルマップに従って歩いていくと、静かな森に囲まれた場所にたどり着きました。その中に古びた建物を見つけました。

表札を確認して入口の呼び鈴を押した時に、突然後ろから声がありました。

「こんにちは」

振り返ると、僕の後ろに買い物帰りなのか、コンビニの袋をぶらさげた50代くらいの男性が立っていました。どうやら彼が自由が丘の陰陽師さんのようでした。

（なんだ？ このちんちくりんのおっさんは？）

そんな僕の第一印象をよそに、陰陽師さんらしき男性はいかにも涼しげにほほ笑んでいました。

「お待ちしていました。裏からどうぞ。あ、玄関ね、今、ペンキを塗ったばかりだから気をつけて」

と、別の扉から中に案内されると、

「どうぞ、お入りください。今、お茶をお持ちしますから」

と言われました。元上司はこの人をどうやって知ったのだろうか？

こうして、僕は今までほとんどしたことがない、ちよつと不思議な話をする事になったわけです。この静かな建物の中で、ちんちくりんのおっさんとふたりきりで。